

カンボジア歴史地域調査参加報告

平成 18 年入学
派遣先国：カンボジア王国
松本 真理子

キーワード：カンボジア，農村，共同調査

対象とする問題の概要

カンボジアにおける研究は対象とする時代においても分野においても、個別に様々な研究が発表されるようになってきたものの、学際的研究は少なく、包括的な視点からカンボジアを見ることはできない。共同調査を実施することによって、従来の研究では実現困難であった網羅的なデータの収集と検討を通して、歴史や社会、経済活動を含め、複眼的に地域像を描き出す必要がある。

これは、南山大学とカンボジア王立芸術大学の共同で行われているカンボジア歴史地域調査への参加報告である。なお、この調査への参加は報告者個人の研究のためのデータ収集を目的としたものではなく、共同研究であるため、調査団がどのような調査結果を得られたかについてはあまり深く触れず、報告者個人が共同調査から何を学んだかについて簡潔に述べる。

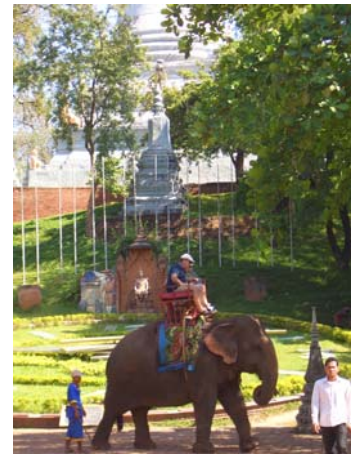


写真1. ワット・プノム

研究目的



写真2. 王宮

調査団の目的の概要は複数の学問領域による共同調査によってカンボジア研究の時空間的枠組を構築することであり、これによってカンボジア研究を他地域における研究の知見と統合することである。

この目的を達成するため、調査は以下の段階によって行われてきている。

第一段階は広域調査による地域性・歴史性の探索である。広域調査の目的は、現在のカンボジア国境内においてどのような歴史的・地域的偏差が生じたかを検討するデータ開発であり、この知見に基づいて第二段階と第三段階の研究が歴史性・地域性の枠組中に位置づけられる。

第二段階は、総合社会調査である。これは現在のカンボジア農村社会がどのような構造と動態を持っているかを明らかにするものである。近代化過程における社会の階層構造およびその変動がどのような過程で進んできているかを、居住史・生活時間調査・社会調査・オーラルヒストリーによる村落史の再構成によって検討する。第一・第二段階が専門を問わず複数の研究者によって行われる時空間枠組の構

築段階である。

第三段階は、第一・第二段階に参加した研究者による個別専門研究である。

このような調査に参加した報告者の目的は、自らの研究対象国であるカンボジアに関する知見を広め、共同調査とはどのように進められていくかについての理解を深めることであった。

フィールドワークから得られた知見について

報告者が参加した 2006 年夏に実施された調査は、主に首都プノンペンから南西に位置するコムポート州とターカエウ州で行われた。調査団は広域調査班、考古班、村落班に分かれ、広域調査班は遺跡調査を行った。考古班は 2005 年に調査団によって発見された複合土塁遺跡の測量に従事した。村落班はこの 2006 年の夏に設置された班であり、コムポート州・オンコーチェイ郡・プラプノム区・P 村において総合社会調査の実現に向けた第一段階として、村の全戸家屋・戸主調査を行った。報告者は主にカンボジア人と日本人の学生各 1 名とともに作業に従事した。



写真 3. 市場での野菜売り

約 2 週間の調査の中で、報告者にとって非常に有益であったことがいくつかあった。まず調査を手伝う中で、考古学や建築学といった、これまで自分にとって学問的に関わりが薄かった分野を専門とする人々が、どのように調査し考えるのかということに間近で触れることができたことである。また、カンボジア人の学生の通訳を介してであったが、村人たち、特に 60 歳以上の何人かに話を聞くことによって、彼ら、彼女らがこれまでどのような範囲で生活をしてきたかということや、ぼんやりではあるが昔の村の姿を思い浮かべることができた。特に植民地期のことに興味を抱いている報告者にとって、村にフランス人が来たことや、反仏活動をしていた者が村外部からの移住者であったという話は非常に興味深いものであった。昔、村で起こったことを知り、長い年月がたった後の同じ場所に立つことで、この村を含む地域一帯、またカンボジアの歴史により興味を抱いた。そして共同調査をする上で重要であると思ったことは、カウンターパートとの関係を良好に保つことと、団員の意識との関係である。団員の行動が調査団の存続を危うくしたり、カウンターパートからの信頼をなくす可能性もありうるのではないか。例えば、よりよい成果を求めるのはもちろんであるが、現地の人からしても危険な場所に行くことがあれば、時には調査の予定を変更するという決断をせざるを得ないときもあるかもしれない。そしてこれは、個人でフィールドへ行って調査するときにも同じことが言えるであろう。

今後の展開・反省点

今回の調査で感じた反省点は、語学力の不足であった。英語を解するカンボジア人の学生と行動を共にしていたため、特に言語の問題で困ることはなかった。しかし自分で自由に言葉を操ることができれば、カンボジア人の団員や村人たちとより多くの言葉を交わし、より多くの知見を得ることが可能であっただろう。現在クメール語に関してはごく基本的な知識しか持ち合わせていないが、語学力の向上に励み、自分の研究に役立てたいと思っている。今後また、この調査団に加わることがあれば、語学力を向上させるよい機会になるのではないかと考えている。